

経済学における形態規定とはなにか（一）

——いわゆる「宇野理論」の性格規定——

山 本 二 三 丸

まえおき

（一）

大正十四年（一九二五年）いらい永年「経済政策論」学者として、主著『経済政策論（上巻）』^{（一）}（一九三六年五月、弘文堂書房刊）をあらわし、東北帝国大学においてもつばら「経済政策論」の講義を担当していた宇野弘藏氏は、敗戦後まもなく公けにした著作『価値論』（一九四七年、河出書房刊）をきっかけとして、戦前からの数少ないマルクス経済学者のひとりとしてたちあらわれ、つぎつぎと経済学にかんする著作をこの世に送りだし、今日では、マルクス経済学界での一方の旗頭として、おしもおされぬ地歩をしかりと占めているようである。宇野氏は、現在でもひきつづき精力的に著書や論文をつくっているようであるが、それらの労作の表題の多彩多様にもかかわらず、それらの内容は、そのどれをとってみても、判をおしたように、ほとんど全く同じ趣旨のことを書きつらねたものであって、文章

経済学における形態規定とはなにか

の体裁、表現様式まで、まったく同一のものが大半を占めているようである。ところで、その論旨はといえば、ただか、つぎの三つの事柄を出ないのであって、これら三つも、つづめていえば、最後にあげた宇野式「原理論」の反復主張ということひとつに帰着するものということができて、いいものである。

(1) この敗戦前の主著には「序」がついているが、その内容は、後年のいわゆる「宇野理論」の出現の経緯を推しはかるのにきわめて有益な示唆をふくんでいるように考えられるので、参考までにこれをつぎにかかげておこう。

「本書は大正十四年以来東北帝国大学に於いて講義して来た経済政策論のここ数年の講義を台として書いたものである。最初は第三篇帝國主義をも入れて一冊にする心算で居たが筆者の都合によって之を別冊として残し、ここに上巻を出版することにした。

東北大学では最初から他の大学と異って商業政策、工業政策を分けず之を一体として経済政策論なる一講座とせられて居たのであって自分は之を経済原論に対する経済政策論として稍々広く解し乍らしかし大体本来の意図の範囲内に於いて講義して来たのである。その点は比較的自由に講義案を作ることとを許されたわけであるが、元来政策論を各種政策に分類して説明することは自分の採らない方法であつたので、歴史的発展に従つて箇々の政策をその一般的基調によつて規定する方法を採ることにした。しかし此の方法は実は可成り困難な道であつて自分も比較的長い期間此の講義を続けながら一向に進展せず、歴史と政策との中途半端なものを出なかつたのである。度度書直おすにあたつても勿論此の欠点を脱することは出来なかつた。もとより政策論の科学的なる研究は箇々の政策を詳細に詮策し之によつてその歴史的規定を明かにするものでなければならぬ。云う迄もなく此の場合にも経済学の理論に拠ることなくしては不可能である。しかし自分には到底斯かる研究に没頭する余裕も力もなかつた。そこで——そしてそれは又当然な方法なのであるが、此の部門の比較的權威と認められる史家によることによつて、又他面には経済学の理論の助けによつて一応の規定を与えるに留まつたのである。したがつて理論的にも歴史的にも何等独創的研究といふべきものはない。勿論概説的な教科書に過ぎないので読者も亦斯かる期待を持たれる筈はないと考えるが一応予め断つて置きたい。

経済政策に関する研究、否主張は最近資本主義経済の混乱に伴つて世界的に氾濫し、殆んど無責任なる放言としか認められない様なものまで横行しているのであつて、経済政策論と云えば或は何等かの新なる救済策でも発見されたかとも考えられ

るかも知れないが、自分には到底斯かる政策の持合せはない。第三篇帝國主義も亦決して斯かる目的を以て書かれるべきものではないと考えている。無論自分も亦此の第三篇に重点を置いては居るが、大体此の書と同様の態度を以て取扱う心算である。そして又重商主義、自由主義の明確なる規定なくしては帝國主義も亦充分には理解し得られないと考えるのである」(序——三ページ、傍点——山本)。

ごらんのように、宇野氏は、「經濟政策論」を専門とし、その主著の構成は、「第一篇重商主義、第二篇自由主義、第三篇帝國主義」となっている。「帝國主義」という術語は、もちろん、レーニンの名著『資本主義の最高の段階としての帝國主義』からそのまま借りてきたものでしかないが、この名著の「資本主義の最高の段階」という明確な文字にもかかわらず、宇野氏はこれを「政策」種類におきかえて主著三篇を組みたて、またその「序論」の中でこのおきかえをつぎのように「合理化」しているのである。

「勿論資本主義社会に於いては重商主義或は後の帝國主義と異つて自由主義は之に自然的なる政策として、否その本来的なる条件として認められなければならない。古典經濟学の理論が歴史的に限定せられながら科学として正しさを有し之によつて、一定の政策を主張し得た所以も亦そこにあるわけであるが、しかし現実の政策としては重商主義帝國主義と同様に一定の資本家的生産の發展の要求として、したがつて又一面的に絶対的なるものとして主張せられるのであつた。かくて吾々は此等の諸政策を何れもその歴史的基礎において各々必然的なるものとして把握することによつて始めて之を批判的に正しく認識し得るのである。その何れの政策に於いても之を絶対的に正しいものとして主張することは資本主義自身を批判することを放棄するものである。云い換えれば資本主義が己にそれ自身最善の生産様式たることを否定して來た以上資本主義の發展の爲めに一定の政策を主張するということは科学的には許されないこととなつたのである。

しかし又資本主義の諸政策をその歴史的必然性に於いて認識するということは此等の政策目的を直ちに容認することでは勿論ない。……」(二四—二五ページ、傍点——山本)。

ところが、敗戦後、いわゆる「原理論」なるものが「段階論」、「現状分析」と並んで唱えられるにいたつて、右の「政策」は、にわかに「段階」にぬりかえられ、「段階論」の中味は、「經濟政策論」の中味そのままに「重商主義、自由主義、帝國主義」の三「段階」で構築されることになっている。この「帝國主義の段階」というさいの「段階」が、レーニンの「最高の段階」からだちにとつて借りてきたものであることはすぐわかるが、このような「帝國主義」という基本的概念を勝手気まま

にいじくりまわしてみても、氏がそれに執着してはなれられない二つの言葉、つまり「重商主義」と「自由主義」なるものがたんに政策を示すものとしてしか意味をもちえず、「資本主義の必然的な発展段階」と直接にはいささかもかわりのあるものでないことは、およそ世界資本主義諸国の歴史的発展についてすこしも知識をもっている者ならば、誰の目にもすぐわかるほどのものである。宇野氏の詩示する「段階論」なるものが、その実、内容からみても体裁からみても、「政策論」をはなはだ意図的にぬりかえただけのものでしかないこと、したがってそれは科学的な意味での「段階」などとはおよそなんのかかわりもないたんなる術学的レッテルにすぎないものだということは、いづれ行論においてとっくりと究明をおこなうことにしよう。

一、「経済学の研究は、原理論と段階論と現状分析とに分化されてなされなければならない。」⁽²⁾

二、右の三つのうちでもっとも基本的・決定的なものは「原理論」であって、それは、「純粹の資本主義社会を想定して、商品経済の法則性を体系的に明らかにする」ものである。⁽³⁾

三、マルクス著『資本論』は、右の「原理論」にあたるが、しかし『資本論』には重大な誤りや数々の致命的な欠陥がふくまれているので、これを全面的に修正し、「純化」する必要がある。⁽⁴⁾このような見地から『資本論』を修正し「純化」して「科学的な原理論」としてつくりあげられたものが、ほかならぬ宇野氏の戦後における主著『経済原論』である。⁽⁵⁾

(2) この主張は、宇野氏のほとんどいっさいの著書、論文の中で、毎回くりかえし述べられている。一例をあげれば、著書『経済学方法論』の序一ページ。

(3) この主張も、氏の著作のいたるところでくりかえし述べられている。たとえば、岩波全書『経済原論』一二ページ、著書『社会科学の根本問題』一一二ページ。

(4) たとえば、著書『経済学方法論』の序の全ページ、著書『社会科学の根本問題』一〇—一二ページ。

(5) この著書『経済原論』には、旧著と新著がある。旧著は、上巻（一九五〇年十二月刊）と下巻（一九五二年三月刊）に分

れているが、新著は「岩波全書」のひとつとして一本にまとめられている（一九六四年五月刊）。新著は、著者自身その「序」でつぎのように述べているところからしてもあきらかなように、内容的には旧著とほとんど変りないものといつてよい。

「本書は、昭和三十三年以来法政大学社会学部で講義してきた経済原論を書き直したものである。篇別構成は、旧著『経済原論』と同様になっているが、内容は、極めて簡単になると同時に改善されているので、ずっとわかり易くなっていることと思う。旧著『経済原論』と同様に「私が『資本論』から学んだものを私自身の考えとして述べたものである」が、旧説に多少訂正を加えた点もある。

旧著『経済原論』は、予想以上に多くの人々に問題にされ、種々なる批評を受けてきたのであるが、根本的には、それがために改めなければならないという点はなかったように思っている」（Ⅲページ）。

この「序」を読んで感心させられるのは、宇野氏独特の徹底した「自己主張」の無限度性である。自分では「多少訂正を加えた」と言っているが、他人の批評によって「改めなければならなくなった点はない」と力説強調している。自分で気がついたものであっても、「旧著が予想以上に多くの人々に問題にされ、しかも他人の批評がみながはずれで本当の訂正箇所はここだというのであれば、当然にその訂正箇所を明示して、他人の蒙をひらいてやらなければならない。それが科学に忠実たる者の採るべき態度というものである。しかし、宇野氏は、「科学」という言葉をマルクスとはまったく違った意味のものと、思いこんでいるので、もちろん、そういう本来の科学的態度をとることはすこしも考えないで、ただ他人の批評はみながはずれで貧弱なものだということをつくりかえし力説強調することと十分だとしているのである。

(2)

「マルクスのうちたてた科学的な理論とは、科学的社会主義である」ということは、エンゲルスの名著『反デュリング論』の中の有名な個所の説明をまつまでもなく、およそマルクス・エンゲルスの著名な労作を一読したほどの者ならば誰でも知っているところであるが、この「科学的科学主義」の基礎であり基本ともなっているのが『資本論』だということも、すこしく注意してマルクスの労作を読めば、容易にわかるところである。たとえば、レーニン

は、マルクスの『資本論』の全内容を指して、「マルクス主義の主要な内容であるもの」と規定し、またこれを「マルクスの理論のもっとも深遠な、もっとも包括的な、そして微細をきわめた確証であり適用であるもの」と的確に指示している。そして、レーニンは、たんに『資本論』の中の字句をあれこれひねくりまわして独自の解釈をしてよることであるような旧式「イデオロギー的」学者などとはまったくちがって、マルクス『資本論』を真に科学的理論の書として把握しこれを正しく適用してロシア資本主義の科学的な現状分析をなしとげ、また世界資本主義の歴史的発展のあとを正しく分析して『資本論』の全内容を継続・発展させて、世界資本主義の現状分析をなしとげ、これらの現状分析をふまえて社会主義革命運動を指導し、成功的に革命をなしとげ、さらに社会主義建設を現実に推しすすめることをなしとげたものである。「マルクス主義の主要内容」であり、「マルクスの理論の全面的な確証であり適用」である『資本論』とその直接の継続・発展であるレーニン著『資本主義の最高の段階としての帝国主义』は、レーニン自身がこの上もなく謙虚に——しかし、つとも科学的に——指摘しているように、「一九一七年いらい世界的な規模で確証された」⁽¹⁰⁾もつともすぐれた科学的理論書である。

(6) 第三篇「社会主義」、第二章「理論問題」。なお、『反デューリング論』の抜粋として著わされたエンゲルス著『空想から科学への社会主義の発展』は、その全文がこのことを説明しているものといつてよい。

(7) 一例として、ヴァイデマイエルへあてたマルクス自身の手紙の中の一節をつぎにかかげておこう（一八五二年三月五日付手紙）。

「ところで僕のことをいえば、近代社会における諸階級の存在も、それら相互間の闘争も、その発見は僕の功績ではない。僕よりもずっと前に、ブルジョア歴史家たちはこの階級闘争の歴史的発展を、またブルジョア経済学者たちは諸階級の経済学的解剖を述べた。僕があらたにやったのは、次のことの論証だ。1、諸階級の存在は、ただ生産の特定の歴史的発展段階に結びつけられているにすぎないこと。2、階級闘争は必然的にプロレタリアートの独裁にいたらしめること。3、この独裁その

ものは、ただ、すべての階級の廃止と無階級社会とへの過渡をなすにすぎないこと。諸階級の闘争だけではなく、それらの存在をさえも否定するハインツェンのようなやからが実証することは、彼らの人道主義を氣どった血の出るような叫びにもかかわらず、彼らはブルジョアジーがそのもとで支配する社会的諸条件を歴史の最後の産物、最高の完成と考えるということ、彼らはただブルジョアジーの下僕であるにすぎず、この隷従たるや、これらのやからがブルジョア体制そのものの偉大や一時的必然性を理解していないので、ますます嫌悪すべきものになるといつとにすぎない」(Karl Marx, Friedrich Engels: Brief über „Das Kapital“, M. E. L. S. Institut, Dietz Verlag Berlin. 1954, S. 59. 岡崎次郎訳『資本論に関する手紙』上巻、四八―四九ページ、傍点―山本)。

「社会主義に直接結びつく理論はすべてこれイデオロギー的理論である」と思いこんでいるような、明治大正式「イデオロギー」にとっぴりつかっている頭脳にとつては、右のマルクス自身の主張は、たんなる「イデオロギー」的主張であつて、なら「論証」されない非科学的議論だとしか考えられないであろう。だがそういう「イデオロギー」的批判こそが、そもそも、「批判」という言葉の内容が全然わからない「学者」だということを自分でさらけだしているものである。「批判」とはまず「正しく理解すること」である。マルクス自身の考え方、その基礎理論を「正しく理解」して、その上になつてマルクスの言葉、主張を「批判」することをしないで、どこに科学的批判があるうか。

(8) 論文『カール・マルクス』の中の言葉。(全集第四版、二十一巻、三四ページ)。

(9) 注(8)と同じ論文の中の説明(前出四三ページ、傍点―山本)。

(10) 著書『資本主義の最高の段階としての帝国主義』の「フランス語版とドイツ語版への序文」の結びの言葉(全集第四版、第二十二巻、一八二ページ、傍点―山本)。

(3)

ところが、この「マルクス主義の主要内容」であり、「マルクスの理論のもっとも深遠な、もっとも包括的な、そして微細をきわめた確証であり適用」であるマルクス『資本論』について、その全面的訂正を主張する世紀的な経済学における形態規定とはなにか

「大学者」があらわれたのである。それはいうまでもなく、一九二五年くらい日本の東北帝国大学で「経済政策論」を専門的に担当してきた宇野弘藏氏である。そこで、つぎにまず、宇野氏が従来の「経済政策論」学者から一転してにわかに「経済原論」学者としてたちあらわれるにいたった最初の著書『経済原論』（上巻）の「序」の中から、氏自身の述べているところを引いてみよう。

「経済学の原理を体系的に述べる所謂経済原論は、マルクスの『資本論』で大体完成せられたものと、私は考えている。私は『資本論』の理論を根底から覆えず学説を知らないものであるが、単にそれだけでそういうのではない。あれだけ従来の経済学説を検討した上で樹てられた学説が、そう簡単に覆えされるものでないことは何人にも明らかであるが、マルクスが社会主義者であったということは、その点では反対、賛成のいずれの側にも最初から無用の成心をもつてのぞむということになって、経済学説として経済学の歴史の中で占める地位が客観的に明確にされないまままで批評されたり、信奉されたりするという結果になったのであった。したがって単にこれを根底から批判する学説があらわれないというだけでは、その完成をいうわけにはゆかない。むしろ問題は、その論理の首尾一貫した展開そのものの内に、マルクスが従来の経済学説を如何に摂取しつつ批判して来ているかを見ることにある。私は、その点では専門的に比較検討し得る者ではないが、しかし『資本論』の理論的展開が、そういう学問の歴史的發展を殆んど完全に止揚していることを感ぜずにはいられないのである。……いずれにしても吾々のようにあとから学ぶ者にとつては、先ずこの偉大なる学問的遺産を受けてつぐのが当然のことといつてよい。『資本論』なんか十九世紀の中葉のものではないかという者は、その後の経済学がこの『資本論』に対してどういう扱いをして来たかを知らないかあるいは考えないものである。学問はそんなことで誤間化され得るものではない。

私は、『資本論』に対して大体そういう風に考えているものであるが、しかし残念なことには、まだ『資本論』の理論的展開をそのままに理解し得るところまでいっていない。納得のゆかない点を多数にもっている。最初、『資本論』の勉強を始めた動機からいえば、ただ単にマルクスという社会主義者の主張の科学的根拠を知りたいということであつたが、後に東北大学に職を得て経済政策論の講義をするようになって、どうしても原理論の一応の把握を必要とすることになり、その都度『資本論』を利用するということを繰り返している内に、私として『資本論』から学び得るものを漸次に学んで来ることになつたのであつて、特に『資本論』を研究したというわけではない。さらにまた『資本論』がその基礎とした従来の経済学説を専門的に検討するということも、したわけではない。したがつて私に『資本論』の理論的展開が納得がゆかないからといって、それで直ちに『資本論』の改訂を主張し得るものは考えていないのである。それどころではない。私の理解している原理論なるものが、殆んどすべて『資本論』から学んだものである。ただ私の理解能力に應じてこれを私なりに体系づけて把握しているに過ぎない。何人にもそうであると思はれるのであるが、原理論を何等かの方法で一応体系的に把握していないと、経済学の他のいわば応用的分野の研究は出来るものではない。……いずれにしても何等の原理論なしに応用研究が行なわれるということとはあり得ないのである。……私自身としては、経済政策の研究をしている間に、一応私なりにまとまつた原理を『資本論』から学ぶことになつたのであつた。

先きに『価値論』を出版したとき、私はその序文で、それがマルクスの価値論の忠実な解説ではなく、多分に私の解釈を加えたものであることをこつた後、「私としても『資本論』から学んだものを私自身の考えとして述べる場合にはこれと同じ方法をとるといふのではない」と述べたのであるが、本書はまさに私が『資本論』から学んだも

のを私自身の考えとして述べたものである。或る点からいえばすべて『資本論』によっているともいえる——したがって特に引用した箇所は単にマルクスの言葉をそのまま借用したというに過ぎない。しかしまた他の点からいえば、『資本論』を勝手に書き替えたものである。一般に『資本論』の解説とはいえない。いずれにしても全く私自身が『資本論』から学んだものを私自身の考えとして述べたものである。ただ私は前にも述べたような理由から『資本論』をこれで改訂し得るものとは考えていない。その点は経済学の種々なる部面を専門的に研究する多くの諸君の批判の協力を得て、誤れるところは正し、また正しい点は正しとして、『資本論』にしても改訂を要するならば改訂してもよいと考えている。現在までのところでは、『資本論』から学ぶにしても、私としてはこういう形でしか学び得ないのである。

たしか昭和十一年であつたかと思う。当時東北大学で経済政策論を講義していた私は、その年原論担当の教授の差支えから一年間経済原論を講義したことがある。細目の点では免も角、大綱はもちろん本書と同じ趣旨による外はなかった。その当時岩波書店の小林勇君からその原論を出版をして見てはどうかと懇懇せられ、自分でも自分の考えを公にし、批判を得ておくのも悪くはないと考え、また経済学の原理を、殊に『資本論』から学ぼうという学生諸君にも、解説というのではなく、むしろこういう形で述べたものの方が反って役に立つのではないかと考えて、是非出版して見たいと思つていたのであつた。……（旧著『経済原論』上巻、序。……は引用にさいし省略した部分を示す。傍点——山本）。

いまからちょうど二十年前に書かれた、この旧著『経済原論』の「序」の内容は、いわゆる「宇野理論」なるものの成立の由来と、したがってまたその性格とを、その著者自身の告白によって示しているものとして、まことに興味

深いものがある。いま、その中から当面参考になるとおもわれる要点をすこしくとりだして解説しておこう。

1 まず、右にはつきり示されているのは、宇野氏が『資本論』を「学んだ」のは、マルクスの立場や考え方を研究してその立場に則してこれを研究・把握しようとしたものではけっしてなく、「経済政策論」という、官許課目の議義をしていく上で「原理論を一応把握しておく必要」が生じ、「原理論」として『資本論』を利用することがもつとも適当であると考え、またその「利用」を二十数年來くりかえしてきたことが結果的にみて「学んだ」ことになった、ということである。

2 ところが、『資本論』を「経済政策論」講義のために必要な「原理論」として利用することを二十数年來くりかえしているうちに、『資本論』そのものが本来「原理論」の書であるし、また「原理論」の書でなければならぬという信念が、利用者たる宇野氏の頭脳にうごかすことのできないほどすっかりとうえつけられるようになってしまったのであって、このことも、著者自身の言葉によってよく示されている。

3 では、なぜ「原理論」などという、いまから一五〇年以上もむかしにもてはやされていた大時代的な「学術的」用語をいまどきもちこんで、これを大いにかつぎまわり、このかびの生えた用語を『資本論』におしつけることによってその「再生」を極力はかるということになっているかといえは、それには、学問 (Wissenschaft) についての、同じく大時代的な、古めかしい「考え方」が生来その「持論」として培われてきているという事情が、決定的な契機となっている。その「考え方」というのは、およそ学問は、どんなものであれ、かならず、「原理」を「体系的」に叙述した「原理論」と、この「原理」を「応用」して研究するものとの二つから成り立っているものであり、またこの二つから成り立つものでなければならない、⁽¹²⁾ というものである。

4 ところが、『資本論』が「原理を体系的に叙述した原理論」の書でなければならないということになると、そこには、種々様々の「誤り」や「欠陥」が見出されることになり、これらの「誤り」や「欠陥」を「訂正」することによって、つまり『資本論』を全面的に書きかえることによって、「原理論」を確立することが、経済学者として当然の課題となる。この課題をはたすことのできる学者は、「経済政策論」学者宇野弘蔵氏を置いてほかにはけつてありえない、という次第である。

(11) 古典派経済学のいわば「完成者」と目されるD・リカードゥ(一七七一—一八二三年)の主著は、有名な『経済学および課税の原理』(一八一七年)である。「原理」(Principles)は、「法則」(Gesetz)とまったくちがいがい、一定の政策基準として、人が—とくに為政者が—それにしたがって一定の行動を採るさいのいわば「規範」を示したものである。科学がとりあげるのは、客観的法則であって、このようないわば主観的にとらえられた「原理」などではありえない。このことは、自然科学の発展のあとをみただけでも明瞭である。「原理」などという狭い、まちがった観念をうちやぶることによって、はじめて科学は科学として確立されることになった。このことは社会科学でもまったく同じであり、とくに経済学においてもそうなっている。マルクスが、その主著『資本論』に、副題としてとくに「経済学批判」という文字を明記しているのは、こうした前期的な「原理」をこととするブルジョア経済学なるものの非科学性を、したがって「法則」を明確にする科学としての経済学の意義を端的に示しているものとみることができるのであって、この「原理」を全面的に批判して「法則」を確立したところに、マルクス『資本論』の決定的意義のひとつが存するのである。だが、リカードゥの『経済学および課税の原理』と並べて『資本論』も同じ「原理の書」であって、ただ『資本論』はその「原理」をより完全に——しかし幸か不幸か、後世宇野氏によって完全に訂正されることを必要とする程度まで、という限界つきで——叙述したものにすぎないと考える宇野氏にとっては、右の「経済学批判」という明確な副題の意味は、ついにつかまれることなしにおわっているのである。

(12) 経済学は「原理論」と「応用研究」との二つから成り立たなければならないという、この「学問」についての宇野氏自身の考え方を、どうかよくごらんいただきたい、学問(Wissenschaft)とは「原理」を「体系的」に叙述したものだという、ヘーゲルかぶれの「考え方」を基準にすれば、「応用研究」は、もとより「学」の名に値しない。「応用研究」は、あくまで「応

用研究」であつて「原理」の「体系」そのもの、つまり学問とはちがう。ところが、経済学について宇野氏がいたるところで述べたてているものは、こうしたヘーゲル式「学問」の「考え方」とは、およそかけはなれたものとなっているのである。宇野氏の述べているところを、つぎにちょっとばかり整頓して示してみよう。

第一の主張——経済学も、学問であるから、必らず「原理を体系的に叙述した原理論」とその他の「応用的分野の研究」との二つから成り立っているものでなければならぬ。

第二の主張——「経済政策論の講義をするために『資本論』を原理論の書として利用する必要があった」、つまり、経済学は、「原理論」と「経済政策論」その他の「応用分野の研究」から成り立っている。つまり、「経済政策論」は、「応用分野」に属するものである。

第三の主張——「経済学の研究は、原理論と段階論と現状分析とに分化されてなされなければならない」、つまり、この学問の内容は、「原理論」と「応用分野の研究」とから成り立つのではなくて、「原理論」と「段階論」と「現状分析」との三つから成り立つものでなければならぬ。

結局、こういうことになるであらう、——つまり、せっかくヘーゲルまがいの「考え方」を借りてきて「学問とは原理の体系的・叙述である」というりっぱな言葉を並べながら、「学問」でないその他の「応用研究の分野」まで「学問」に入れてみたり、「経済政策論」を「学問」の一分野に仕立てあげてみたり、そしてとどのつまりは、「学問」を三つに分けてしまひ、「段階論」も「現状分析」も、ともに経済学という「学問」の構成部分であるということ、で、「段階論」と「現状分析」なるものの「学問」としての重要な意義を強調することにおわっている。これでは「原理」と「応用研究」という常識的な、つまり俗物的なとらえ方と結びついた「学問」についての自身の「考え方」を自分でふみにじっていることになる。なんでも「学」という文字をつければ、「学問」になり、「論」という文字をくっつけば「理論」が出来あがるというのならば——そして、「段階論」という「学術的」文句はまさにこの種の発想法にもとづくものといつてよいが——「学問」についてのヘーゲルまがいの「考え方」などはひけらかさないほうがいいのである。そもそも、「段階論」や「現状分析」は、「学問」(Wissenschaft)のうちの「原理」を示したもののか、それとも「応用研究の分野」であるのか？ またもし、「経済学」という「学問」そのものが「原理論」と「段階論」と「現状分析」との三つに「分化」しているものであるというならば、つまり、この三つによつてはじめて「経済学」という「学問」が成り立つというのであるならば、宇野氏自身、まだ「経済学」をつくりあげる

ところまでいつていないという客観的事実が当然認められてよい。というのは、「原理論」は氏の著書『経済原論』が一応それにあたるとしても、「段階論」については、ただ「重商主義、自由主義、帝国主義」という「経済政策」の名称が並べられて説かれるにとどまり、なんらの「体系的」叙述もいまだつくりだされておらないし、「現状分析」にいたっては、その「体系的」叙述はおろか、断片的分析すらその影も形も見られないからである。

(4)

ところが、宇野氏自身が「経済政策論」学者から「経済原論」学者に成長・転化し「経済原論」学者としての地歩を確立するにつれて、『資本論』から学び得るものを漸次に学んで来る」というさきに引用した当初の「控え目」なやり方はみごとに発展をとげて、「多数の納得のゆかない点」はみな『資本論』の「誤り」または「欠陥」のせいであるとし、これらの「誤り」や「欠陥」をつぎつぎと指摘して、『資本論』を全面的に再検討する必要がある、これらの「誤り」、「欠陥」を訂正し、「原理論」として「純化」したもの——『経済原論』——をうちたてるべきであるということが精力的に主張されるようになる。

「……『資本論』の所説を原理論として純化することを要請するために種々なる点で修正することになる……。」
 (『経済学方法論』の序、一ページ、傍点—山本)。

「マルクスの所説にしても、理論的に解明されえないような点をまで擁護されていては、社会主義の実践活動にも決して有益なこととはいえないであろう。また私の主張は、私自身いつも明らかにしているように、マルクスの所説から展開される理論によるものであって、多くの諸君が私の所説を反駁しているのを見ると、マルクスを擁護しようと

しながら、却ってマルクスの学説を逸脱している場合が少くないのである。私としては、マルクスの所説にしても、何等かの目的のために擁護しなければならぬというものではない。理論的に反駁を許さないような体系を完成してゆくことこそ、マルクス経済学を真に擁護することであり、また社会主義を真に基礎づけるものと、私は考えている」
(前出、序二ページ、傍点—山本)。

「……しかし『旧著『経済原論』』にたいする——山本」多くの批評は、『資本論』に謬りがあるはずはないという立場でなされたのであって、『資本論』に対する、私の種々なる疑問は、解かれないでむしろ強められることになったのであった。……私の経済学は、その根本において、『資本論』から学んだものにほかならない。しかし『資本論』をイデオロギーの書として、これを如何なる批判に対しても擁護しようというのは、これを読みもしないで排撃するのと同様に、『資本論』の偉大なる科学的業績を現代に生かすものではないと思っている。『資本論』における問題点、問題点として明らかにしてこそ、『資本論』に学ぶこともできるのである」(新著『経済原論』、序Ⅲ—Ⅳページ、傍点—山本)。

『資本論』は、マルクスが旧来の経済学説をほとんど余すところなく涉獵し、哲学的に訓練された論理と史学的に深化された識見とをもって、徹底的に批判しつつ展開した理論体系をなすものであって、学問的に検討し、批判するといってもそう容易にできるものではない。事実個々の研究者の能力には余るものといっても過言ではない。しかしそれだからといって、『資本論』は、多くのマルクス学者に信じられているように一言一句を動かすことのできないような、絶対的な正しさをもつものとするわけにはゆかない。ことにマルクスが『資本論』を完成した当時には、マルクス自身にも具体的には予想できなかったような、資本主義のその後の発展を見るわれわれは、『資本論』をそのまま受けいれないというような事実にも直面してきているのであって、『資本論』はそういう新しい事実に対し

でも、どういう意味で正しいか、あるいはまたどうい、面、で正しくないか、を改めて検討してみることが、いやしくも『資本論』の学問的研究に従事するものにとつては、避けてはならない課題となつてきている。……」（著書『社会科学の根本問題』一九六六年、一一―一二ページ、傍点―山本）。

（13）宇野氏はここで「私の主張は、マルクスの所説から展開される理論によるもの」と自身で主張しているが、これはきわめて主観的、恣意的な断定であるとのそしりを免れることはできない。「マルクスの所説」は、これを読む人の立場、読み方によつていかようにもなり、そこからどんな「理論」でも「展開」することができる。そもそも、マルクスは、学問についてそれが「原理論」と「応用研究の分野」との二つから成るものだといった「考え方」とか、『資本論』はその「学問」のうちの「原理論」にあたるものだという「思いつき」など、いさゝち持ち合わせていないし、こういう「考え方」や「思いつき」にたいしては、よしんば真剣にこれを提案する者がいたとしても、あわれみの念をもつて一笑に附したことであらう。マルクスがとつくの昔に片づけてしまったような「考え方」にしがみついて都合のよいように『資本論』の字句をひねくりまわしておいて、さて、これが「マルクスの所説から展開される理論によるもの」だというとなれば、それは、見方によっては、一種の論理的ペテンともいってよい。

（14）つまり、宇野氏自身の著書『経済原論』こそ、「理論的に反駁を許さないような体系」を示したものだということが、ここにそれとなく示されているわけである。ところで、宇野氏は、いたるところで、「理論的」という「学術的」用語をつかつているが、いったい「理論的に反駁を許さない」とは、どういうことか、一度でもよい、説明してみるがいい。そしてそのさうい「体系」という、ヘーゲルから借りてきたらしい素人だましの、用語の意味も、後学のために、よく説明してみてもどうであらうか？ ついでながら、宇野氏の『経済原論』の内容についていえば、それが、「理論的に反駁を許さないような体系」であるかどうか、たんに論理的にみてもすこぶる問題あるもので、とうてい「体系」などといえたようなものではないのではないかという点は、のちにとくとく吟味されるべきところである。

（15）「その根本において」ということは「マルクスの立場、その基礎的理論をしつかりつかんで」、ということである。そもそも「学問」についてマルクスが明示しているマルクスの立場をすこしも理解しようとはせず、大時代的な「考え方」で「学問」とか「原理論」とか並べたてていながら、「その根本において『資本論』から学んだもの」と主張するとすれば、それは、

なんといっても、りっぱな「論理的」まやかしのほかない。

(16) この一句は、まことに「格調高い学問的表現」がつらなっていて一見もっともらしく見えるが、その実その全文は事実とちがっており、また論理的にみて、すらすらとこぶる問題のある「用語」の綴り合せにすぎない。第一に、「資本論」はたんに「旧来の経済学説の批判的研究」によって成ったものではない。マルクス・エンゲルスが述べているように、それは「イギリスの唯物論、フランスの社会主義、ドイツの古典哲学」を「余すところなく渉獵し」てつくりあげられた基礎的理論をもとにしてはじめてできあがったものである。第二に、「哲学的に訓練された論理」というのは、全くの混乱を示している。そもそも「哲学的に訓練する」などということがあろうか！ そのばあいの「哲学」とは、誰の、どういうものを指すのか、言ってみるがいい。マルクスがしっかりとらえていたのは、弁証法的唯物論であり、これを歴史に適用した唯物史観であって、たんなる「論理」ではない。第三に、「史学的に深化された識見」とは、いったい、どういうことを意味しうるか！ 「史学的に深化する」などという珍芸当をやらかすことができるのは、大時代的な「学問」という言葉をひねくりまわすのが得意の「論理的」作文屋だけである。こういう素人だましの「用語」をひけらかすのは、歴史について正しい把握の欠如している「純粹社会」論者だけであるといつてよい。マルクスが堅持していたのは唯物史観であり、これを美事に「適用」し、また「確証」したのである。第四に、マルクスの『資本論』は古典派経済学の『原理』を継承・発展させたという意味で「批判的に展開したもの」ではさらさらない。古典派経済学をふくめて、ブルジョア的経済学そのものの批判をしたものである。第五、なるほど『資本論』では、商品からはじまって貨幣、資本というように、体系的叙述が示されている。だが、それはあくまでも「体系的叙述」であって、いわゆる「体系」ではない。宇野氏はいたるところで、この「体系」という、素人だましの「用語」をひけらかすのが得意であるが、あとで詳細にみられるように、その実、「体系」という言葉の論理的な意味も、理論的な意義も、完全に明確にすることなく「大体のところ」でつかっているだけなのである。

(17) 「一言一句を動かすことができない」というと、一般の人は、必ず「そんなことはありえない」というにきまっている。この「きまっている」ところをねらって、宇野氏がこのような文章を書いているといつてよい。これは、いつでも詭弁を弄して俗物にとりいる扇動政治屋の口口とくくりといつてよい。肝腎な点は、理論的にみて決定的な意味をもっている部分であり、それとかかわりのある一字一句である。マルクスのような天才が、同じ天才的人物エンゲルスとの密接な協力のもとに、骨を刻む苦しみをもって推敲に推敲を重ねて書きあげた文字である。ことに第一巻は版を改めて、二人によりさらに厳密な校

訂が加えられているものである。これらの文字を一読しただけでその中にふくまれている深い意味をただちに読みとるなどということが、ふつうの人間にどうしてできようか！ それゆえ、われわれもまた、まず第一になすべきことは、刻苦してマルクスの綴った文章を、その一言一句をかみしめて、その深い意味をとらえるべくけんめいに努力しなければならないということである。そこに記された文字の意味を理解することが先決問題である。ところが、正しい・深い理解というものはきわめて困難で、容易ではない。意味のわからないところ、これまで自分の身につけていた俗物的見識からすれば誤りと思われるような箇所は、いくらかもある。あるのが当然である。だが、それだからといって、それらの箇所をただちに、『資本論』の「誤り」、「欠陥」、「重大な問題点」だといふらすのは、ただ自分のもっている見識の貧弱なことを自己暴露するだけである。まず理解する (verstehen) ことが第一、そのつぎに批判すべきところがあれば、マルクスの立場、その「方法論」に則して批判しなければならぬ。マルクスとちがった立場に立っていたり、その「方法論」をまったくまちがってとらえているようでは、とうてい理解することすらおぼつかない。ところが、世間には、大学教授という職業にいうことで慢心し、「哲学的に訓練」することも全くせず、「史学的に深化された識見」を身につけるどころか、大時代的な、かびの生えた俗物的常識論だけを後生大事と守りながら、マルクスが著わした多数の労作に眼を通す手数もかけず、ただもっぱら『資本論』だけをひねくりまわし、議論のためのいっさいの材料を『資本論』ひとつから借りながら、しかも『資本論』の「誤り」や「欠陥」や「重大な問題点」をあれこれ数えたてて、それでマルクス経済学を發展させたものだといふれまわっているような手合も、すくなくないのである。こうした人物は、えてして「節約こそ、経済の原則である」などという、資本主義的モラルを忠実に体得して、『資本論』以外のどんな重要な文献も、世界史の發展の総括としての諸理論も、また現実の世界経済の動向についての研究も、すべて「節約」してしまうという点で、この種の「経済原則」をみごとに率先実行しているのであって、マルクスの言うところの「俗物」の一典型をみごとに示しているものといつてよい。

(18) ここで『資本論』をそのまま受けいれえないような事実」といっているのは、十九世紀後半の、とくに一八七〇年以降の、「独占資本主義への移行」のことを指している。宇野氏は、「原理論」をもって「純粹資本主義社会の原理を体系的に明らかにしたものの」という、独得の「考え方」をマルクスにおしつけ、マルクスは、「資本主義は發展すればするほどますます純粹化する」といっているのに、現実の發展では、ますます「不純」なものが出てきた、だからマルクスの主張は誤りである、訂正しなければならないと、大いに書きたてているのである。だが、のちにおこなわれる事実についての検討によってもあき

らかなように、マルクスは、どこでも、また一言といえども、「資本主義は発展すればするほどますます純粋化していく」などという、観念的な「空論」は言っていない。このことは、マルクスが、『資本論』を書きあげることによってはじめて「社会主義を科学にした」という、有名な一事によっても明白である。マルクスが精魂こめて論証しているのは、「資本主義は発展すればするほど、諸矛盾が激化・成熟して、必然的に社会主義社会への革命的移行がおこなわれる」という、歴史的發展法則である。「純粋」などという、マルクスとおよそ無縁の、素人だましの言葉を自分でひけらかし、これをマルクスにおしつけておきながら、さて、マルクスは「純粋化する」といつているのにそうはならない、誤りだ、重大な問題だ、といいつてわめきたてるとすれば、これは、客観的にみれば、まぎれもない俗物的チンピラのつかう言いがかりとまさに瓜二つ、といつてよい。

(5)

このようにして、「マルクス主義の主要な内容であるもの」、「マルクスの理論のもっとも深遠な、もっとも包括的な、そして微細をきわめた確証であり適用であるもの」として歴史的に確証されたはずの『資本論』は、この敗戦国日本において戦後にわかに『資本論』学者としてあらわれた「経済政策」学者によって、その重大な「誤り」、「欠陥」、「問題点」をつぎつぎに指摘されたばかりでなく、『資本論』は「原理論」の書たるべきであるとの宣告が下され、そのうえ、驚嘆すべきことに、『資本論』の「誤り」、「欠陥」、「問題点」をすべて完全に訂正・超克した極めづきの「原理論」書が、この世紀的な「大学」の手によってつくりだされたのである、しかも、このはじめてマルクスを超克しえた「大学」が、日本における学府の最高峰との定評ある東京大学で教授の地位を占め、マルクス経済学を学ぼうとするエリート学生や同じ大学の教授・助教授層のあいだに絶大な影響をおよぼすことになり、したがってまた、日本の経済学界における隠然一大勢力をきざぎざあげるにいたったのは、けだし理の当然といつてよい。マル

クス『資本論』には「重大な問題点」、「誤り」、「欠陥」があるとはつきり書き、その全面的修正をはつきりと主張し、しかも『資本論』の上を行くという『経済原論』を自分の手であらわしているのである——いったい、どこに疑う余地があるのか？ この「世紀的な大学者」、「真正のマルクス経済学者」の画期的名著述——『経済原論』——を読まないでどうして、マルクス経済学を学んだなどということがいえるか？ マルクス『資本論』は、日本語訳でも優に三〇〇〇ページをこす大著である。この大著は、眼を通すだけでもたいへんである。ただ読むというだけでなく、読んでその内容をすこしでも理解するということになると、これはまたなまやさしいことではない。そのためには、すくなくとも、「マルクスの基礎的な理論」といわれるもの、つまり、「哲学的唯物論、弁証法、唯物史観、階級闘争」にかんするマルクスの考え方の基本をみっちり学習し、身につけていなければならぬし、その上、『資本論』の中の難解な文章の意味を正しく読みとる論理的思考能力が絶対に必要である。こうした難事業がわずか一年やそこらの期間でなしとげられるはずはない。二、三年骨を折ったところでどこまで自力で到達しうるか、わかったものではない。そのいちばん良い例は、K・カウツキーである。輝かしいドイツ社会民主党の理論的指導者カウツキーでさえ、数十年『資本論』にその精力をささげたにもかかわらず、『資本論』について、致命的誤謬をおかしたというではないか。マルクスは、「学問にとっては平安の大道はない。そして嶮峻な小径をよじ登るに疲れることをいとわない人々だけが、ひとりその輝やける絶頂に到達する仕合せをもつものである」⁽¹⁹⁾などとうまいことを言っているが、だれがそんな古くさいおだてにのるものか。彼マルクスは、とつくの昔にわが宇野弘藏氏によってかるく超克されてしまっているではないか。難解な字句をひねくりまわす大著『資本論』よりも、すでに『資本論』を止揚しつくした宇野氏の『経済原論』がわれわれの目の前にあるのである。この名著は、さすが「世紀的大学者」の手に成る画期的著述だ

けあって、全書版二二七ページにみごとに凝縮されている。ここにはマルクス経済学の基本——「原理論」——が、そこそその「エッセンス」だけが、「論理一貫的」に示されているのである。この、いわばマルクス経済学の精粹の正統「ダイジェスト」版によって、マルクス経済学の「真髓」を手とりばやくつかまえるほうが、はるかに「有効」である。名著『経済原論』二二七ページを読むには、一週間もあれば十分である。一週間でマルクス経済学の「真髓」を把握してしまえば、あと残る時間はすべてその他の「有効な」活動に捧げることができる。「ムダを節約して、最大の効果をあげる」——これこそ「大学者」宇野弘藏氏の説く「経済原則」にびたり合致したもの、「経済原則」をただちにみごとに「実践」にうつしたものではないか!!

(19) これは、マルクスが『資本論』フランス語版の出版者、モーリス・ラシャトルにあてて書き送った手紙(一八七二年三月一八日)の中の有名な一節である。この手紙は、エンゲルス版『資本論』には掲載されておらず、現行フランス語版では、諸「序文および後記」のつぎに、写真版で手紙全文がそのままのせられている。現行ドイツ語版(研究所版およびディーツ版)では、「フランス語版への序文および後記」と題して採録されている。なお、ここに引用した一節のすぐ前で、マルクスは——とくに日本のインテリゲンチヤにとって——きわめて適切なことを述べているので、その部分をつきにかかげておくことにしよう。

「……私が用いてきた、そして経済上の問題にはまだ適用されたことのない分析の方法は、最初の諸章の読解をかなり困難にしています。それで心配なのは、いつでも性急に結論に到達しようとし、一般的な原則と自分が熱中している直接の問題との関連を知りたがるフランスの読者が、ほとんど先きにすすむことができないからといって、読みつづけるのがいやになりはしないかということです。

これが一つの不利な点ですが、これにたいしてわたしのできることは、あらかじめつぎのことに注意をうながし、真理を求める読者に覚悟をさせておくことだけです。学問にとっては平安の大道はない。……」(エディシオン・ソシアル版、第一巻、四四ページ)。

経済学における形態規定とはなにか

このようにして、日本の「学問」の最高峯・東京大学の諸教授、学生からはじまって全国に散在する諸大学でのその「影響下」にある諸教授、学生を通じて、さらには有力な商業ジャーナリズムを通じて、「マルクスを超克する世紀的大学者」としてのイメージはいよいよ確固たるものになり、いわゆる「宇野理論」は一世を風靡しつつあるかにみえ、いわゆる「宇野学派」^{シュレ}は、日本のマルクス経済学界を完全に牛耳るにいたったかにみえる。こういう形勢を前にしては、「革命」を呼号する「左翼的」学生といえども、この「ダイジェスト」版を一読しなければ、マルクス主義経済学について一言もしやべる資格がないというような錯覚におちいらざるをえない。あらゆる既存の「権威」なるものを徹底的に批判しその粉砕を叫ぶ「革命的」インテリゲンチヤも、東大以下、諸官学・私学の教授、学生とマス・コミの上にかとその地盤をきずきあげているこの「世紀的大学者」の「権威」の前には、てもなく拝跪し、盲従する。ある程度まで「マルクスの基礎理論」を学習し『資本論』について真接その正しい理解をえようとするインテリゲンチヤは、多かれ少なかれ、その「ダイジェスト」版・『経済原論』と『資本論』とのちがいを感じ、『経済原論』の中の説明の非論理的なことをおぼろげに感じとるが、しかし、これらを明確にとらえ、言葉に表現することとはなかなかできない。宇野氏の文章はきわめて晦渋であって、御本人ひとりにしかわからないようなていのものである。その数多くの「すぐれた」高弟・教授たちが同じ文章についてさまざまにちがった解釈をし、相争っていることがしばしばみられるという事実がこれを示しているといつてよい。それは、むしろ、晦渋な文章だからこそなにか深遠な内容を持ち、したがって「権威」あるもののように見えるという事情をすっかり呑みこんだ上での作爲的晦渋といつてもよい。これに疑問を抱く者は、その意味がつかめないがゆえに議論において必ず「敗北」した形においてやられる。これをつぐ者も、「批判」する者も、ともども理解できないし、また理解してないのであるから、両者

の間の議論は、新興宗教の聖經典をめぐる議論のようにならざるをえない、結局は、その聖經典なるものが、いよいよその「深遠さ」、「神秘さ」と「權威」をいやまし加えるだけである。こういうわが国でのインテリ層の当然の成り行きを見ては、「マルクス主義的」学生にその「地盤」をおいている扇動政治屋たちも、事態に「適応」せざるをえない。いわゆる「宇野理論」がマルクスの『資本論』とどんなに甚だしく相違しているか、マルクス『資本論』のいっさいをどんなに意図的に「解釈」し書きかえたまったくのにも、せものであるかということが読みとれない者は、政治屋としての活動をつづけようとするかぎり、大衆の「考え方」に「順応」し、かれらの拝跪する「權威」を正真正銘の「權威」として同じようにもちあげ、その「權威」をかりて、さらに指導的政治屋としての自分自身の「權威」を確保することに心をくばらなければならない。つまり、一方において「世紀的な大学者」の手に成る「経済学原理論」を世紀的な「創造的發展」として大いに称揚しながら、他方において、しかしそこには「重大な問題点」、「盲点」がすくなくからずあるのであって、その「問題点」、「盲点」を明確に指摘し、これを超克する真に「革命的」理論をつくりあげるものは、乃公自身である、と書きたてるのである。宇野氏は、「学問」「原理」についての大時代的な「考え方」の中に『資本論』をおしこめることで『資本論』を簡単に「止揚」しつくすことによって、いとも手軽に——まさに経済的に——マルクスの「權威」を借りてその上に宇野氏自身の「權威」をつくりあげたものといつてよいが、扇動政治屋は、さらにその上を行つて、いわゆる「宇野理論」の「偉大さ」を称揚し、その「盲点」をいくつかかぞえあげるといふ手で、さらにより以上に安直に——つまり、もつとも経済的に——宇野氏の「權威」をかりて自分自身の「權威」をたちまちつくりあげてしまふのである。だが、この政治屋のやり口というものは、客觀的にみれば、まさに一種の賭けでしかない。というのは、もし、宇野氏の「原理論」なるものが、『資本論』とは似ても似つかぬ

マツカなにも、でしかないということが明るみに出たばあいには、この煽動政治屋の「学問的権威」はもとより、その「政治的生命」もたちまちのうちにけしとんでしまうことは必定だからである。

(20) この種の手口は、今日の日本で小ブル的無政府主義と不可避免的に結びついた小ブル的革命主義にかぶれたインテリ層を「革命的」言辞で引き回している「評論家」や煽動政治屋たちのもつとも愛好するところとなっている。それらの中で、この手口を最大限に活用しているのは、トロツキーをかついで「革命的マルクス主義」なるものを呼号している黒田寛一氏である。黒田氏は、宇野氏の「権威」確立をみるや、たちまち『宇野経済学方法論批判』(一九六二年二月)という、特異の題名の著書をもひ、いちばやく自己の「権威」確立をはかっているが、その中のきかせどころをつぎに少々あげてみよう。

「理論戦線のこうした頽廃のただなかにあつて、独自の理論的省察に裏づけられた『学問の独自性』に坎んする信念をつらぬくことにより、卑俗な政治主義への陥没から完全に解放されつつ、マルクス経済学の体系的把握をめざした学問的探究をつみかさねてきたのが宇野弘蔵であり、その業績は、日本マルクス主義経済学界における最高の一成果として、いま大きくうかがひあがつている。『宇野経済学体系』とさへよばれる彼の『資本論』研究は、その解釈主義的墮落を「正統派」の仮面によつてからくもおしくしている日共系の『資本論』解釈主義者たちの水準を、はるかにこえている。それは、戦前から『資本論』を論理学として読むこと」を課題として追求してきた梯明秀の「経済哲学」とともに、日本マルクス主義経済学界にうちたてられた峰をなすものであつて、これらと批判的に対決することなしには、マルクス経済学研究の今後の発展はありえない、といつても決して過言ではないであらう」(一一——一八ページ、傍点—山本)。

「宇野経済学の場合、しかし、一方ではそれが経済学原理論の諸分野(価値論・恐慌論・利子論など)に密着して展開されていること、他方では日共系の俗流解釈主義者の諸研究と鋭い対極をなしていること、このゆえに——梯経済哲学の場合とはことなり、——わが国の経済学界において極めて強力な地歩をかためつつ、いまや「宇野シュレー」をかたちづくっているのである……」(二三ページ、傍点—山本)。

「独自の思想的追求でつらぬかれて、宇野経済学体系と対決し、その問題性をえぐりだし、真実の学問的批判をなしとげてゆくためには、まずもつてその基底にある方法論——宇野経済哲学——を全面的にうけとめ、その盲点をつかみだすことからはじめなければならない」(二三ページ、傍点—山本)。

ごらんのように、やれ「独自の理論的省察」とか、やれ「体系的把握をめざした学問的研究」とか、やれ「独自の思弁的追求」とかけんめいに書きたてているが、「宇野理論」の中味について「省察」を加えた結果、そこには「理論」や「思弁」よりも、もつと低次の問題があること、つまり論理そのものが支離滅裂であるという事実が明らかになったとすれば、右のようにはやしかたは、いったい、どういうことになるであらうか！「解釈主義的墮落」などという聞えのよいかけ声を並べているが、宇野氏の所説こそ、まさに大時代的な「学問」についての「考え方」を固守する官許「経済政策論」学者の典型的な「解釈」でしかないのである。このはやし方は、そもそも、「経済哲学」などという言葉をはきかしてはいるが、「経済哲学」というものがブルジョアの学問分類の産物であり、したがって本来反マルクス主義的概念でしかないということがちーっともわからないとは、どういう「革命的」マルクス主義者であらうか！宇野氏にとっては「方法論」と名づけるほどのものではなく、しいていえば、「学問」についての全く粗雑で大時代的な、ヘーゲルかぶれした「考え方」、つまり前期的「イデオロギー」がそれにあたるといってよいのであるが、宇野氏自身にしても、氏の「方法論」こそが「宇野経済哲学」であると宣伝されたのでは、まったくもって有難迷惑なことであらう。宇野氏自身は、一見謙虚にも、「……ヘーゲルになると、その批判的研究はおろか、ロクに読んだともいえない……」と天下に表明しているのである（著書『社会科学の根本問題』、一二二ページ、傍点—山本）。

ところで、「宇野理論」についてその「反日共」性を強調して、自分自身の「反日共」的・トロツキスト的姿勢への支持をかきあつめる一助にするという黒田氏のやり口は、扇動政治屋としての資質を十分に示すものといつてよいが、しかし、宇野門下の高弟の一人で「宇野シュレ」の有力な伝道者である大学教授が「日共」の中で「理論的指導者」の一人としておさまっているという事実を見ることができず、したがって、修正主義理論『「宇野理論」をかつぐ「理論家」が必然的に修正主義党と吻合せざるをえないという客観的法則がたらぬいている事実を全く見落しているところに、真の指導的政治家にはとうていなりえない俗物的扇動政治屋の限界が示されているといつてよい。

(6)

そこで、マルクス経済学を学ぶ者のひとりとして、わたしは、これからしばらくのあいだ、宇野氏の所論の内容と

その性格を吟味してみたいとおもう。宇野氏は、「もっぱらマルクスの『資本論』を学ぶことによってこれを『純化』して宇野『経済原論』をつくりあげた」とみずから主張しているのであるから、やはり、マルクスの経済理論を出発点として、とくにマルクスの基本的な「考え方」と「立場」をまず正確にとらえることから始めなければならず、また、宇野氏がこの当然の前提要件を首尾よくそなえることをはたしているかどうかの吟味も省くことはできない。宇野氏はしばしば、「マルクスと自分とのちがいを指摘することは意味がない。わたしの所説について誤りを指摘すべきだ」という趣旨のことをのべているが、これは、「科学」とか「理論体系」とかいう「学術的」用語をさかんにつかう者の発言としては適當ではない。なぜならば、『資本論』の中に出てくる主要な概念——範疇——は、ただの言葉ではなくして、経済理論全体とのかかわりにおいて一定の規定された内容を持ち、また、基本的な「考え方」を正確に反映し「体現」したものであるからである。宇野氏がもし、マルクスとちがった基本的な「考え方」をし、「経済理論」全体についてマルクスの「立場」・「考え方」と全くちがったものをもち、マルクスのそれに従わないのであるならば、マルクスの概念規定をそのまま持つてきてあれこれ文章を作成するのは、まったくの誤りであり、厳密に云えば、マルクスの基本的な概念規定の変造というのほかない。すでにこれまで注記その他で折にふれて指摘したように、宇野氏の所論のいっさいは、なるほどマルクスがうちたてた概念規定を、言葉そのものとしては採用しているが、その内容のとらえ方は、完全にちがっているのである。そもその「経済理論」という簡単な言葉からはじまって、いっさいの「学術的」用語の解釈は、マルクスの概念規定と全くことなり、したがって、マルクス経済理論にたいするいわゆる「宇野理論」は、用語こそマルクスのそれに似ておれ、内容的には、まったくその本質を異にするものといつてよい。わたしは、このことを、これから、両者の比較検討を通じて論証してゆきたいとおもう。

だが、そのまえにぜひとも指摘しておかねばならないのは、きわめてひんばんに、「科学」、「体系」、「理論」、「原理」、「原則」、「法則」、「……論」等々といった「学術的」用語をつかつて一見「理論的」な文章を連ねているかにみえるが、その実、これらの用語についての氏の理解は、マルクスのそれとはまったくちがったもの、完全に観念的・俗物的な解釈を出ないということ、そして、これらの用語を配しての作文は、論理的にみてすら成り立ちがたいものだ、ということである。はつきりいえば、宇野氏の所論は、理論的内容などを問題にする必要はない、たんに論理的にみてすら、きわめて問題の多いものばかりで、その非論理性、没論理性はとうてい理論など論ずる資格のさらさらないものだ、ということである。このきわだった没論理性、したがって論理的錯乱、飛躍、独断——これが黒田氏のいわゆる「特自な理論的省察」、「思弁的考察」である。——は、宇野氏の所論全体を通じての根本的特質であって、表現をかえていえば、この没論理性、錯乱的論理によってはじめて氏の「理論」はつくりあげられているといつてよい。いわゆる「宇野理論」の吟味をすすめるにあたっては、右の没論理性を念頭において、宇野氏のさかんにつかう「学術的」用語に焦点をあてて、順次に適当なテーマを選びだし、独立論文としてつぎつぎに論究し、副題には、全篇を通じて明確にされる「宇野理論」の基本的性格の総括が狙いであることをあらかじめ示しておくことにした。この最初の論文では、とりあえず、「まえがき」を記し、論究の大体の方向を示すと同時に、テーマとして、まず「形態規定」という用語をとりあげて、序論的考察をこころみることにしたものである。だが、序論的考察とはいうものの、この簡単な吟味によって、宇野氏の所論の基本的性格、つまりその完全な没概念性、没論理性は十分明らかにされ、また、経済学における最も重要な基本的な諸概念についての宇野氏の解釈の徹底した恣意性も、的確に実証されると考えてよい。そういう意味において、本論文は、いわゆる「宇野理論」批判の序論をなすものといつてよい。

一

「形態規定」という用語について、宇野氏がどれだけの「理解」をもっているかは、この言葉をつかって作文した宇野氏の簡単な文章および文句をみれば、たちどころに知ることができる。つぎに、その模範的な文章と文句のいくつかを、まずお目にかけよう。

イ、「マルクスが『資本論』を商品をもって始めながら、商品・貨幣・資本の諸形態を純粹の流通形態として展開しえなかったということは、極めて重大な問題をなすのである」⁽²¹⁾

ロ、「……流通形態としての資本……」⁽²²⁾

ハ、「商品・貨幣・資本の流通形態……」⁽²³⁾

ニ、「そのためには先ず商品・貨幣・資本の形態規定が純粹の形で展開されなければならない」⁽²⁴⁾

ホ、「……先ず商品・貨幣・資本の形態規定を展開し……かくて商品経済の原理を明らかにする経済原論は、当然に流通論をもって始められ、生産論はこの流通形態によって把握された生産過程として、その次に展開されることになるのである」⁽²⁵⁾

ヘ、「……生産過程に外部的な流通形態……」⁽²⁶⁾

ト、「……商品・貨幣・資本の流通諸形態は、いずれもかかる外来的なもの、共同体内への滲透として展開されるのである」⁽²⁷⁾

チ、「資本は、商品経済に特有なるものであって、むしろ生産過程と直接には関係なく、貨幣の特殊な使用方法

ら発生するのである」。(28)

り、「商品・貨幣・資本の形態は、事実上もそうであるが、理論上も生産過程と直接には関連なく展開されうるのである。いいかえれば如何なる生産関係の下に生産されたかに関係なく、生産物は商品として交換され、貨幣として蓄積され、さらにまた資本の価値増殖の手段としての商品の貨幣による売買は行われるのである。それはむしろ共同体の内部からでなく、共同体と共同体との間に発生し、共同体の内部に滲透してゆく商品経済に特有なる性質を示すものといつてよい。かかる形態は、生産過程と本来的に結びついた、生産過程を内容とするその形態をなすわけではない。いわば生産過程にとつては外的なる形態にすぎない。それだからこそ、この形態の廃棄を主張する社会主義が可能となるのである」。(29)

(21) 『経済学方法論』、三一三—三一四ページ、なお、イからリまで引用文中の傍点およびゴシック体はすべて山本のもの。

(22) 前出、三一四ページ。

(23) 前出、三〇八および三一三ページ。新著『経済原論』、三八および四五ページ。

(24) 『経済学方法論』、三〇九ページ。

(25) 新著『経済原論』、一六ページ。

(26) 前出、二二ページ。

(27) 前出、三八ページ。

(28) 前出、一九ページ。

(29) 『経済学方法論』、三〇七ページ。

諸君、どうかここに抜粋・引用した文章と文句をとくとごらんいただきたい。ここには、たんに「形態規定」という「学術的」用語についての宇野氏の「理解」のほどが的確に示されているばかりでなく、「商品・貨幣・資本」と

経済学における形態規定とはなにか

いう基本的な範疇についての、「生産過程」「流通」「生産関係」「商品経済」等々の用語についての、宇野氏の「理解」の程度が示されているばかりでなく、経済学全般についての宇野氏の考え方の全部が、そして、宇野氏『経済学原理論』の「科学性」のありったけが、そして、なによりもまず、これらいっさいと結びつきその中心となっている完全な没論理性が、すべて残らず明白に示されているのである。これらの文章や文句を通じて示されている氏の主張の大綱は、つぎの三つにしばることができるといってよい。

一、「商品・貨幣・資本は流通形態である」。

二、「商品・貨幣・資本の流通形態は、事実上も理論上も、生産過程と直接関連はなく、いいかえれば生産物がいかなる生産関係の下に生産されたかに関係ないものである」。

三、「したがって、経済原論は、当然に流通論をもって始められ、生産論はこの流通形態によって把握された生産過程として、その次に展開されることになる」。⁽³⁰⁾

(30) 新著『経済原論』、一六ページ、傍点—山本。

まず、一の「主張」によく注意されたい。一見すると、「流通形態」などという「学術的」用語がおかれているので、この「主張」はなんらか重要な、ことによると画期的な意味をもっているものではないかというようにおもわれる。だが、「流通」という言葉と「形態」という言葉についての正常な理解をもって、この「主張」を読むならば、そこにあるのは、まったく混乱した没論理的文章だということがすぐわかる。こういう「錯乱」した主張がどのようにしてひねくりだされたかも容易に察せられる。つまりこうである、——「商品は流通という運動をする、貨幣も同じく流通という運動をする、資本も同じく流通という運動をする。だから、商品・貨幣・資本は流通形態である」。

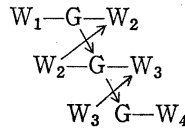
これは、いったい、どういう文章であろうか？　これ以上に超ノンセンスな文章をでっちあげることが、できるだろうか？　これは、つぎのような「主張」とまったく同じ性質のものである。

「猿は歩行という運動をする、チンパンジーも同じく歩行という運動をする、人間も歩行という運動をする。だから、猿・チンパンジー・人間は歩行形態である」！

「形態」という、「学術的」用語を配しての没論理的作文という意味では、両「主張」ともまったく同じであるが、しかし、よく注意してみるならば、「歩行形態」という文句の方がはるかに客観的真理に近づいていることがわかる。なぜならば、猿・チンパンジー・人間は、他の動物にたいして、「歩行」運動というきわだった特質を共通に有しており、「歩行」運動をするというところに、それらの本質的なメルクマールのひとつが存するからである。これにくらべれば、「流通形態」の方は、まったく救いようのないほど混乱しており、またたんなるたわごと——「迷妄」——を並べただけのものでしかない。それは、「歩行」とちがって、「流通」という「学術的」用語についての混乱した理解とでたらしめな使い方がこれを示している。いったい、「商品が流通する」とはどういうことか？　たとえばa商品とb商品との交換($W_a - W_b$)であるならば、それはたんに「二商品の交換」にすぎず、「商品の流通」とはいわないし、また、「流通」といってはならない。「商品の流通」とは、通常「諸商品の流通」(Warenzirkulation)のことであって個別的商品の個別的運動を指すものではないが、一步ゆづって、個別的商品の個別的運動について「流通」という「学術的」用語をあてはめるとすれば、「商品が流通する」ということは、 $W_1 - G - W_2$ という運動をすることである。いったい、この運動形式 $W_1 - G - W_2$ は、なんの運動を示すものか——それは、商品の、商品そのものの、商品それ自体としての形態における運動を示すものか？　否、である。それは、商品の、貨幣形態を通じての、貨幣

形態による運動を示すものであり、つまるところは、貨幣形態そのものの運動を示すものである。このことは、「貨幣が流通する」ときの形態を考えてみてもすぐわかる。いったい、「貨幣の、貨幣としての、運動形式」つまり、「貨幣の流通」は、どんなものか？ それは、いうまでもなく、 W_1-G-W_2 であり、厳密にいうならば、その「連鎖」であるといつてよい。つまり、「商品の流通」も「貨幣の流通」も、ともに W_1-G-W_2 で示されるということになる。「商品・貨幣は流通形態である」という、この錯乱した文章をひねりだすと、宇野氏は、両者の運動「流通」について、つまり「商品の流通」とはどういうものか、「貨幣の流通」とはどういうものかということについて、最小限度必要な知識ももたず予備的考察もしなかったし、また、できもしなかったといつてよい。

(31) ここで「連鎖」といったのは、つぎのような「全体的な絡みあい」をいったものである。



なお、「貨幣の流通」としては、 $G-W-G$ でも考えられるが、これは、「貨幣の、資本としての、運動形式」であつて、たんなる貨幣の、貨幣としての、運動形式ではない。

さらにまた氏は、ここに「資本」をつけ加えて並べているが、これも、没論理性のみならず、理論的混乱を露呈している。第一に、宇野氏は「利子生み資本」を「資本のなかの資本」「理念」⁽³²⁾と称しているが、いったい、「利子生み資本」は「流通」するか、「利子生み資本」は「流通形態」であるか!? 第二に、「資本の流通」を文字で示せば、

$G-W-G'$ か、または $G \xleftarrow{P_m \dots W} G'$ で表わされるといってよいが、両者とも、各段階または各局面でおこなう「流通」運動は、いずれも、 G または W としてであり、 $G-W$ かまたは $W-G$ から成り立っている。つまり、資本は、各段階においては、貨幣または商品（または生産要素）としての形態規定において運動をおこなうのであって、商品・貨幣とは異なるもの、つまりそれらとちがう資本としての形態規定において運動をおこなうのではない。

(32) 『経済学方法論』、三〇七ページ

要するに、どちらの面からみても、たんなる論理的形式からみても、また理論的命題としてとりあげても、右の主張は、申し分のないで、たゞ、混乱の雑炊でしかなく、およそ科学的理論と名のつくようなものはひとかけらもない。このような錯乱した主張をかけることができる頭脳は、もはや、正常な論理的思考能力の完全な喪失と、それにもかかわらず、衛学的な「命題」濫造癖とを示すものにほかならないのであって、こういう頭脳がやれ「科学」とか、やれ「理論」とか、やれ「体系」などといってあれこれ「学術的」用語をひけらかしても、それらはみなハッタリであり、完全な迷妄のおしゃべりに終らざるをえない必然性をもっているといつてよいのである。とはいえ、一の文章は、まだ、没理論性、錯乱的論理を示すものとしては、序の口にぞくする。決定的に重要な意義をもっているのは、二の主張である。

二

さきに引用したりの中でもはつきりと述べられているように、宇野氏は、「商品・貨幣・資本」の形態は、直接には「生産過程」と関連をもたず、「どんな生産関係のもとで生産されたかに関係ないもの」と、断固主張している。氏

は、これによって、さきの一の主張、すなわち、「商品・貨幣・資本」はたんなる「流通形態」であって、「生産関係」とは直接なんら関係をもたない形態であるという没論理的主張を裏づけると同時に、「経済学原理論」はしたがって当然、「流通論」から「生産論」、「分配論」へというように「体系的」に展開されねばならないものだという、宇野式「原理論」の「体系」なるものを「合理化」しようとしているのである。

だが、「商品・貨幣・資本」という「形態規定」は、はたして、生産（＝「生産過程」、「生産関係」と直接関係のないものであろうか？ いったい、その場合の「形態規定」とは、生産関係とはまったく関係のない、たんなる物としての物に附着した「形態規定」であろうか？ これにたいする答えは、決定的意義をもっている。すこしく誇張していえば、論者のもっている「経済理論」全体の成否を決定するほどの重みをもっているといつてよい。宇野氏が右の答えとして、生産関係に直接関係ないものとの主張を堅持し、終始この主張をくりかえしかけているのは、この主張がほかでもないいわゆる「宇野理論」の根底をなすものだからである。

宇野氏は、「いかなる生産関係の下に生産されたかに関係なく、生産物は商品として交換され、貨幣として蓄積され、さらにまた資本の価値増殖の手段としての商品の貨幣による売買は行われるのである」として、「原始共同体」という「生産関係」について、「それはむしろ共同体の内部からでなく、共同体と共同体との間に発生した」、という「説明」をあたえている。われわれは、まず、「いかなる生産関係とも関係のない」ものとの主張を裏づけるために宇野氏によってとくにかかげられた「共同体」の事例について、すこしく論理的考察を加えてみよう。

まず、右の宇野氏の文章の冒頭におかれた「それ」という代名詞は、例によってなにを指したのかしかとはわからないが、あとの「発生し」という動詞の主語としては、まず「商品」という「形態」を指すものと考えてまちがい

ないであろう。つまりこうである、——「商品という形態は、共同体の内部からでなく、共同体と共同体との間に発生した。だから、商品という形態は、いかなる生産関係のもとに生産されたかに関係のない、たんなる流通形態である」。

読者諸君、どうかこの「共同体の内部からでなく、共同体と共同体との間に発生した」という、宇野氏自身の文章の論理的意味をよく玩味されたい。宇野氏は、この文章をかかざることによって、「共同体の内部」も、「共同体と共同体との間」も、同じ「生産過程」、同じ「生産関係」が存在するものと考えていることを告白している。これこそ、宇野氏が、マルクスのいう「論理的抽象力」のなんたるかを理解せず、またその肝腎の「論理的思考能力」を完全に欠いていることの証左である。これは、同時に、「弁証法」という「学術的」用語をあれこれひねくりまわしている宇野氏が実は弁証法のべの字も身につけていないことを端的に示すものである。

「共同体と共同体との間」という言葉は、すでに、それぞれの共同体が、それ自身だけで、他とは無関係に、存在しているものではない、ということを示している。どちらの共同体も、その存在は、すでに二面的に規定されたものとなっている。それは、一方においては、内部的には、——それ自身においては、——完結した共同体であり、「共同体的生産関係」によって全一的に統一されている。だが、同時に、他面において、それは、対外的には、——他者、にたいしては、——あくまでも「私的所有」者である。二つの共同体が合して一個の共同体を成すものでは、けっしてない。それぞれの共同体は、それぞれ他者にたいして、全くの他人として、相互に「私的所有」者として相対する。しかも、両者の間で相互に必要とする生産物が交換されるとすれば、それは、その交換される生産物種類にかんしてだけであるといえ、両者の間に一種の社会的分業がおこなわれた——「事後的に」——ことを示すものである。「共同体と

共同体との間」という一定の關係を前提するということは、共同体がすでに二面的な關連、内部的と對外的との兩側面の統一物として実存し、われわれはそれがあるがままに、その全体的關連において、とらえなければならぬということの意味するだけである。兩共同体が一定の關係をもつにいたつても、なおかつ、内部的側面だけみて、そこには「共同体」という「生産關係」しかない、などと主張するのは、全くもつて非弁証法的な一面的理解というのほかない。兩共同体は、内部的には全一的な「共同体」であつて、その生産物は内部的にはけつして「商品形態」をとらないが、對外的には、相互に、「私的所有」者をあらわし、かつ、「社会的分業」を相互に担つたものとして、つまり「私的所有と自然發生的な社会的分業」という、りっぱな「生産關係」を相互に形成しあい、したがつて、相互の間においてのみ、生産物は私的に交換されて、事後的に――對外的にのみ――「商品」となる。こうした全体的な關連をとらえることができず、「共同体と共同体との間」の「關係」も、「共同体」内部の「關係」もまったく同じ「共同体」的「生産關係」であると思ひこみ、「共同体」という「生産關係」のもとでりっぱに商品形態が生れるという、おどろくべき主張をかかげて得々としてゐる。こゝに⁽³³⁾論理錯亂的「理論」家にとつては、その「學術的」用語を毎度のことひけらかすという手口にもかかわらず、「形態規定」という肝腎の用語の簡単な意味すら、説明することはとうていできないのであつて、事実また、その意味内容についての説明は一言たりとも与えられていない。そしてそれは、まことに理の当然といつてよい、というのは、「どんな生産關係とも無關係」ということでは、「形態規定」のケの字もひきだしてこれるものでないからである。この点は、なおつぎの節で究明することとし、つぎに、リの中でひきつづき述べられているさまざまな論理的たわごとについて、すこしく照明をあてておくことにしよう。

(33) さきにリの中で見たように、宇野氏は、「商品形態は、事実上も理論上も、生産關係とは關係なく展開されう」などと

いう、「學術的」迷論をぶっている。では、ひとつ、たとえば、「原始共同体」という「生産關係」のもとで、商品形態が展開されるということ、を、事實上の実例で示してみるのがいい。このばあい、二つの「共同体」をもつてきて、それらの間に生れたなどといって恬然としているのは、全くの思いあがった独りよがりというのほかない。「歴史的知識」も「歴史的研究所」もちあわせないと自分でいっている宇野氏が、「共同体」そのものの中から「商品形態」が生れたという「歴史的」事実を、いったい、どこで見つけたものであろうか!? 同じように、「原始共同体」という「生産關係」から「商品形態」が生れるということ、を、ひとつ「理論的」にも展開してもらいたいものである。精々のところわれわれが聞かせてもらえる「理論的展開」とは、没論理的展開、つまり純然たる錯亂的論理でしかないであろう。なぜならば、二つの「共同体」の間には「共同体」の「關係」はないのであって、右のような「迷論」を「合理化」するには、どちらも「共同体」だから、その間にある「關係」も「共同体」的關係だという詭弁を弄する以外に手はまったくないからである。

(一九七〇・五・二〇)